



奥羽線の開通（明治34年4月11日 山形—上山間）



明治34年4月11日（初代山形駅）



大正5年（2代目山形駅）



昭和42年7月20日（3代目山形駅）



平成5年11月27日（4代目山形駅）

9 駅の誕生と商業の発展

明治後期～昭和初期

鉄道の開通と町の変化

1872（明治5）年の10月14日、新橋と横浜の間を日本最初の鉄道が開通しました。それから、29年後の明治34年4月11日、上山・山形間が開通して、山形から福島を経て、東京まで蒸気機関車で行くことができるようになりました。開通の日、3台の踊り屋台が市街を練り廻り、花火が打ち上げられ、市民みんなが喜びました。

鉄道の開通と同時に、山形駅も営業を開始しました。山形駅はその後、大正5年、昭和42年の改築を経て、現在の山形駅（平成5年11月27日完成）は4代目になりました。

山形駅の開設によって、駅の周辺が大きく変わっていきました。十日町と山形駅を結ぶために、山形城三の丸の土手を切り開いて新たな駅前通りがつくられました。また、従来は桑畑であった一帯に、次第に新しい街並みがつくられていきました。大正5年の山形駅の改築の頃には桑畑等はほとんどなくなり、駅周辺はお店などで賑やかな街になりました。

鉄道などの陸上交通網の整備は東京や横浜等、国内各地との経済的

鉄道の開通は文明開化の中心産業であり、産業や経済、人々のくらしだけでなく、町づくりも大きく変わって

いきました。

山形の町やくらしがどのように変化したのか調べてみましょう。



山形駅ができた頃の地図（明治34年頃）

な結びつきも活性化しました。山形市の商業は、かつては主として十日町、八日町などの市南地区が盛んでしたが、鉄道交通網の整備により、旅籠町・六日町・宮町などの市北地区にも、有力な商家が出るようになりました。

しかし一方では、笹谷街道の交通や最上川舟運は、鉄道輸送におされて急激に振るわなくなり、貨物の輸送の中継地として栄えてきた関沢や船町は次第に寂れるようになりました。

鉄道の開通とくらしの変化

山形までの鉄道が開通するまで、汽車で東京に行くには、関山峠を越えて仙台に出るか、笹谷峠を越えて宮城県の大河原に出て、東北線に乗りしなければなりません。鉄道の開通により、山形にいながらにして汽車に乗れることになり、東京に出るのも極めて容易になりました。

物資輸送も便利になり、これに伴って新しい品物が山形に入るようになりました。山形で海産物といえば、従来は塩物か干物に限られ、普段の生活で鮮魚を食べることはほとんどありませんでしたが、それが可能となるなど生活にも大きな変化が現れるようになりました。

ミニ知識 13

走れ一号機関車

～日本鉄道の生みの親「佐藤政義」～

明治5年に日本初の機関車が新橋・横浜間を走りました。

この鉄道の開通に大きな業績を残し、「わが国鉄道創始の功労者」と言われた人が山形県遊佐町出身の佐藤政義です。

彼は、文明開化のためには貿易や鉄道が大切だと強く主張し、日本最初の鉄道をつくる工事の責任者になりました。



横浜—新橋走る1号機関車



長谷川吉三郎 氏

両羽銀行（現山形銀行）の3代目頭取で、大正7年の山形市立商業高等学校（十日町校舎）創立の際に、土地と建物すべてを寄付しました。

明治になり、県庁をはじめ主な官庁が山形北部に建てられ、同時に商業の中心も北部に移っていったことから、南部の十日町に商業高等学校を設立し、江戸時代の十日町の賑わいを復活したいという氏の強い思いがありました。

ミニ知識 14

百貨店経営の老舗「大沼」

1700（元禄13）年に初代大沼八右衛門が当地七日町で商いを始めたのを創業とし、山形では唯一の地元資本百貨店として、300有余年小売業を営んできました。

1956（昭和31）年11月20日に地下1階地上4階建ての店舗を開いたのが本格的な百貨店としての始まりです。



↑大沼デパート

山形商工会議所の変遷

昭和38年より商業会議所から商工会議所となる



↑東南村山郡役所内に、山形商業会議所を設立（明治30年）



↑初代山形商業会議所庁舎（大正2年）



↑三浦記念山形市商工会館（昭和38年）



↑山形商工会議所会館新館（平成21年）

山形市立商業高等学校の変遷



↑十日町校舎（大正7年～）



↑小荷駄町校舎（大正13年～）



↑あかねヶ丘校舎（昭和50年～）

商業の振興と山形商業会議所の設立

山形の町は、最上川舟運や、出羽三山・蔵王参り宿場町、そして城下町として賑わい、江戸時代から、商人町として栄えてきました。その後、陸上交通路の整備、横浜・石巻間の汽船就航、鉄道の開通等により仙台・東京・横浜などとの経済的結びつきが強まりました。

経済活動の活発化に伴い、投機や不正取引の弊害を防止するための自主統制機関として商業会議所が各地に設立され、山形市でも有力商人19名が発起人となり、明治30年に東南村山郡役所（山形市役所）内に山形商業会議所を設立しました。

商業会議所は、市の商業活動の企画や実施の中心となって、商品販路の開拓や県物産紹介機関の東京設置等の運動など、山形の経済に発展に貢献してきました。

商業発展の後継者を養成する「山形市立商業学校」の設立

明治35年3月、山形商業会議所は市に対して、商業地として発展してきた山形の伝統の後継者を養成するために、商業学校設立の意見書を提出しました。その後、長谷川吉三郎から、商業学校設立のために十日町の米穀生糸取引

所土地・建物の寄付があり、市は国に対して商業学校設置の許可申請を行い、大正7年4月1日に山形市立商業高等学校が創設されました。

大正13年には小荷駄町校舎に、昭和50年にはあかねヶ丘校舎に移転し、その間、3万人もの卒業生が本県、本市はもちろん、全国各地の財界、実業界の牽引役として活躍をしています。

山形の経済の発展に尽くした三浦新七

昭和に入ると、金融恐慌により金融機関は苦境に陥っていました。両羽銀行（現山形銀行）として例外ではなく多くの不良債権を抱え込んでいました。当時、東京商科大学の教授だった三浦新七は郷里山形に帰り、両羽銀行の経営再建と地方金融界の安定に献身的に取り組みました。

さらに、三浦は、七日町の市立済生館付近に所有していた土地と三浦銀行社屋に現金5万円（当時の換算）を添え、山形市に寄付をしました。市は、それを基に、昭和38年、市役所向かいに「三浦記念山形市商工会館」を建設し、山形商工会議所も入居しました。また、三浦の遺徳を記念し、山形市の産業経済の発展に寄与するため、記念会が設立され、その事業の一つとして昭和38年から毎年「三浦記念賞」が贈呈され、平成25年までに84個人、52団体が表彰されています。



↑三浦新七博士記念館（山形商工会議所会館5階）

平成21年4月、山形商工会議所会館5階に三浦新七博士記念館が開館しました。博士の生涯や直筆の原稿等ゆかりの品を紹介する常設展示と、年度ごとにテーマを設け博士の生涯の一時代にスポットを当てた企業展示を行い、博士の功績を紹介しています。

博士の足跡や時代の空気を感じることができる落ち着いた空間となっております。



三浦新七 氏

明治10年、山形市の旅籠町に生まれ、東京高等商業学校（現一橋大学）を卒業後、ドイツに留学し、歴史学を研究しました。

昭和2年に山形に戻り、両羽銀行（現山形銀行）の危機を救い、当銀行の頭取となります。

その後も、東京商科大学学長、日本銀行顧問、貴族院議員など歴任しました。

ミニ知識 15

郷土史研究と三浦新七

三浦新七が残した業績の一つに「山形県郷土研究会」の創設があります。両羽銀行の救済に乗り出した直後の昭和3年4月に研究会の会長となり、地元の研究者たちを集め、援助しながら地域史の掘り起こしを進めました。

研究会のメンバーの一人であった理学博士の長井政太郎氏は、山形新聞社が主催した座談会の中で、「手がけたものは、納得するまで徹底して取り組む主義で、埋蔵品の発掘の時は、自分でクワをとって発掘に携わった人である。」と、恩師の思い出を語っています。



↑山形県郷土研究会の人たちと